

曙光



(しょう)

2005.10.1
東北大学全学教育広報 No.20



花のあるキャンパス風景

-
- 法人化後も大学の最重要事項は「教育」である -
理事(中期計画担当) 早稲田嘉夫... 2
 - 教員研修の必要性と成果
よい教育を目指して研修する教員たち
高等教育開発推進センター教授 齋藤 紘一... 4
 - 退職(予定)教員から
 - パーソナルの学問と教養教育運動
 - 人文・社会科学の共通術語を求めて -
文学研究科教授 高城 和義... 6
 - 大学教育における看護学教育
 - 看護学教育にとって、教養教育は専門教育でもある -
医学部教授 齋藤ひろみ... 8
 - 教職：教わること教えること
工学研究科教授 井口 泰孝...10
 - 果てなき海へ漕ぎいでて
流体科学研究所教授 南部 健一...12
 - 専門を支える教養の広さを
- 教養の原点は歴史観と潮流観 -
前松下電器副社長
東北大学監事 杉山 一彦...15
 - 特別寄稿
 - 私の市政運営 - まちづくりの12年を支えたもの
前仙台市長 藤井 黎...17
 - 平成17年度後期セメスターの履修手続について
.....22



法人化後も大学の最重要 事項は「教育」である

理事（中期計画担当） 早稲田 嘉 夫

国立大学百年の歴史において、経験したことがない程の大きな変革と言われる「法人化」が平成16年4月にスタートし、1年が経過した。法人化されたと言っても、4月に新入生を受け入れ3月に送り出すことを基本とする時間の流れ、講義や試験などを含む学務・教務の視点から見れば、法人化前とあまり違いを感じない。しかし、法人化に伴い国立大学法人東北大学として、平成16年～21年までの6年間を一期とする「中期目標・中期計画」を文部科学省に申請、認可を受けており、かつこの中期計画の進捗状況に関する説明責任を負う仕組みは、国立大学時代にはなかったことである。

東北大学は、教育目標・教育理念として「指導的人材の養成」を掲げ、「研究第一主義」の伝統や「実学尊重」の精神等に基づいて、教育研究の質の向上を目指す中期計画を立てている。吉本高志総長をはじめ多くの方々が指摘しておられるが、大学の最も重要な使命は「教育」である。その理由は極めてシンプルで、「研究も間違いなく重要であるが、どのような研究も人が行い、人が支えるので、最終的には人材養成（＝教育）に行き着く」からである。社会に役立つ研究成果や産学連携の推進は歓迎されることであるが、社会が大学に対して本当に期待しているのは、独創的な技術開発・産業化等に力を発揮する人材供給である。もちろん、今後大学は、研究成果などの社会還元について積極的に努力すべきである。しかし、たとえ発想がどのようにユニークで、すばらしい研究成果であっても、新産業・新技術としての成否は、むしろ市場のニーズなどに優先されるのが現実である。なお、大学における高等教育では、次の視点が極めて重要である。

- (1) 未解明な事象に果敢に挑戦する際に必要な素養を十二分に取得させる。
- (2) 各専門分野において未解決な課題を苦勞の末に突破し、胸をわくわくさせるような意識を身につけさせる。
- (3) 限られた時間内では完全に課題を解決できない場合にも、与えられた条件の中で最適な方向などを積極的に提案するような意識を身につけさせる。

このような教育を大学で、どのような期間、どのように行うべきかを一言で表わすことは難しい。しかし、大学に入学後の4年間（医学系：6年間）で着実に実施すべき点は間違いのない。このような「高等教育」という大学の重要使命を主として担う大学内の組織は、学部であり、（学部を兼務する）大学院研究科である。

一方、東北大学を含めほとんどの国立大学は、専門教育・大学院教育の強化充実のため、この10年間に教養部を改組・転換し、これまでの「一般教養」という概念から「一般教育」あるいは「全学教育」へと変化させてきた。これからは、これらの実績等を踏まえ、全学（教養）教育・学部教育重視を一層強化させる必要がある。その理由は、全学教育や学部教育の充実なしに大学院教育の充実はあり得ないからである。このような視点に立つ中期計画の一環として、本学では既存組織の再編を基に、平成16年10月に「高等教育開発推進センター」を設置し、新たな活動をスタートさせている。学生支援・サービスの向上との相乗効果を発揮させるため、この新センターに対する学内外からの期

待は大きい。なお、本学では、学部・研究科と「附置研究所」、「学内共同教育研究センター」等との緊密な連携により、伝達すべき知識の前線を拡大し、教育を行う上で把握しておくべき最先端の専門分野を常に保持することで、近年における学術の多様化・急速な展開に対応している。

我が国の（国立）大学制度は、第二次大戦後アメリカ型の、教育の機会均等の確保と全人教育（リベラルアーツ）に移行した（？）が、大学教員のアカデミズムの自由を中心とする旧制度の運営も継続されてきた。各大学が、平成16年4月の法人化を機会に自らの役割について、学長のリーダーシップの下で中期計画の達成を通じて「個性化」を進めつつある。さらに、領域横断型、あるいは異なる領域を融合する取り組みに対する積極性も認められる。アメリカ型の複数の専攻、主専攻（Major）と副専攻（Minor）を義務づける全人的教育（リベラルアーツ）への流れと受け取ることができる。ただし、教育をする側も、受ける側も、主専攻の素養を十二分に身につけさせた後で、副専攻あるいは複合専攻（Joint major）を取らせて幅を持たせるのでなければ、真に役立たないことを認識することが肝要である。すなわち、単に異なる領域の知識を教示するだけでは、未解決の課題への応用力をつけさせられるかは疑わしい。

我が国の企業の多くは、これまで学部卒業者・大学院修了者に対して潜在能力だけを求め、あとは仕事をしながら学ぶオンザジョブトレーニングで対応してきた。しかし、近年の経済の低迷、コスト削減要求などの環境変化によって従来型では対応しきれず、企業側で即戦力を求める傾向が強まりつつある。しかし、それでも大学に期待する即戦力の人材とは、一定の領域について十分な基礎知識があり、さらに特定の専門的知識・技術等を身につけている人、それにプラスしているいろいろな問題に対して柔軟に考えられる包括的対応力を有し、課題解決への挑戦の気概を持つ人と考えて良いと思われる。オンザジョブトレーニングによって、短期間で順調に成長できる人とも言える。

大学に対する社会的要請は絶えず変化しており、そのような変化への対応を大学自身が怠ってきたわけではない。しかし、法人化を機会に学長のリーダーシップを十分発揮させ、理念に基づく迅速で的確な対応が期待されていることも事実である。また、大学ならびに大学院は、それぞれ高等学校あるいは大学の単なる延長と位置づけるべきではない。大学ならびに大学院は研究現場を伴う「高等教育」が提供される唯一の場所であり、自らの意志で大学という組織が提供するすべてのものの中から、自らの目標を選択し、それに必要な知識や経験を体得しつつ成長しようとする責任ある成人の共同体である。最後に、大学は「学術・文化」を創造するところでもあり、この役割は法人化に全く関係なく、今後も大学が良い意味で守っていくべき重要な使命と考えることを指摘し、まとめとする。



教員研修の必要性と成果 よい教育を目指して研修する教員たち

高等教育開発推進センター 教授 齋藤 紘一

教養部が廃止され、4年（または6年）一貫の学士課程教育体制に移行して10年余の時を経た今日、学生はもちろんのこと若手の教員には、教養部と学部に分離した大学教育体制のことは遠い過去の話として耳にする程度のものであろう。一方、教養部と学部に分離した教育体制のもとで大学生活を経験してきた教員の中には、全学教育は未だに関わりの薄いものと考える者がいる。今日の大学教育カリキュラムの中で、全学教育は極めて重要な位置付けにあり、本学では、全学の理解と参加により全学教育を支え、より一層改善しようとする努力が続けられている。この改善努力への取組みの重要な例に全学教育教員研修（FD）があり、その具体的成果はシラバスの改善に表れている。

本学の全学教育FDの開催計画は、平成11年、大学教育研究センター（現高等教育開発推進センター）教員2名が教員研修先進校であった北海道大学のFDに参加した時から始まり、第1回研修会は平成12年3月、北海道大学高等教育開発総合センターの教官2名を講師に招いて開催された。参加者は、主に各学部の評議員や教務委員長であった。以後、全学教育評価委員会の主催、大学教育研究センターの運営により開催され、基礎ゼミFDを含め平成17年度末までに15回のFD開催を数えることとなる。その間に、FDの内容も東北大学独自のものに成長してきた。最近の研修は、学生生活における諸問題の理解とシラバスの構成に焦点を当てた内容となっている。

大学教育改革の流れのなかで

かつて我が国の大学教育カリキュラムは、大学設置基準に従って、一般教育科目、専門教育科目、外国語科目、保健体育科目に4区分され、それぞれの科目について大学卒業までに修得すべき単位数が規定されていた。このような大枠のなかで、日本の大学は第2次世界大戦後の我が国の復興と未来の発展を支える幾多の人材を育成し、社会に送り出してきた。この教育カリキュラムを有効なものとするために、各大学には専門教育科目以外の科目の教育を担当する組織（教養部）と専門教育を担当する組織（学部）がおかれ、それぞれに優れた教師を配置してその目的を果たそうとしてきた。

やがて、このような大学教育体制を見直さざるを得ない状況が到来する。外的要因は、少子化、国際化、高度情報化、大学進学率の増加などの急速な社会的変化であり、内的要因の一つは教養部での一般教育と学部専門教育の連携や接続の円滑化、緊密化の必要性が増したことであろう。

平成3年、大学教育カリキュラムが4区分に規定されていた従来の枠組みから、各大学が教育上の目的を達するために必要な科目を開設し体系的に教育課程を編成ができるように大きく変わった。いわゆる設置基準の大綱化である。これを機に、多くの大学で教養部が廃止され、4年（または6年）一貫学士課程教育へのカリキュラムの大改革が始まった。本学では、専門教育ではない教育を大学全体で受け止め、全学の教員の参加によって実施するという、従来とは大きく異なる教育システム「全学教育」を誕生させた。全学教育科目は、2学部以上に開講されている科目であって、特定の学部のみを対象に開講される科目は該当しない（専門科目としている）。

教育重視への大きな変化の中で、大学教員に戸惑いや混乱、不安が生じたことは全国的傾向であったが、当然の成り行きかもしれない。大学教員の殆ど全ては研究について十分に指導され豊富な経験

を有するが、教育について特別な訓練や研修を重ねた経験は極めて少ない。中学や高校教師のような教育実習の経験や研究授業などの研修活動は行われていないのである。

FD

各大学の存在は社会的ニーズによっている。大学教育は、社会的ニーズの把握と、これに対応する目標設定についてのコンセンサスのもとに展開される。社会的ニーズは時代とともに変化するため、大学に対する社会の期待は時代で異なり変化する。この変化に対応しうる柔軟性と、不動の構えで安定した信頼を受けている伝統とが合わさって大学の個性や学風が表れてくる。コンセンサスの形成は極めて重要である。大学が掲げる教育理念・目標、また、このために設定されているカリキュラムについての共通理解のもとで、各教員が担当する授業の位置づけを十分に理解して、初めて大学教育として効果あるものとなるはずである。各教員が勝手な大学教育理解のもとで教育活動を展開しては大学の教育は成り立たない。大学人として各自の学問・研究は自由になされるべきである、しかし教育については、各教員が、学習塾のように各自全く自由に行うというわけにはいかないのである。

この約10年間、大学改革は急速に進められており、ともすれば教育の理念・目標についての共通理解が不十分になる恐れがある。この問題の解決策の一つとしても、教育に関わる資質向上を目的とする各種の研修活動、いわゆる Faculty Development (FD) の重要性が指摘されている。

FDとシラバス

本学の全学教育FDや基礎ゼミFDで、教員に理解を求めている主な事項は、大学における教員の役割は、「学生への知識や技術を伝授する」指導型から「学生の知識発見・知識形成・問題解決等の学習を支援する」促進型に移行していること、学習のプロセスには目標設定、学習活動の展開、設定目標への到達度の評価が重要であること、これらを踏まえて、教員は、授業の設計書、授業計画書に当たるシラバスを準備し、授業を受けようとする学生に示す必要があること、である。

シラバスについては、学習目標。この授業で学ぶことによって何が獲得できるのか、何ができるようになるのか、具体的に授業はどのように展開されるのか、予習や復習の内容（1単位は、授業だけでなく予習・復習にかかる学習時間をふくめて設定されている）成績評価はどのように行うのか、使用する教科書や推薦する参考書に関する説明であり、いわば学生に対する約束として明示するものであると説明されている。特に、学習目標の記述に当たっては、学習者が主語になるような文で書くことが重要であると強調されている。

全学教育のシラバスを見ると、上記の点を理解して作成されたシラバスが年を追って増えてきており、教員研修（FD）が確かな成果を生み出している。本学の全学教育の理念、内容、方法、運営の改善は進められてきたが、なによりも、各教員の教育に対する意識が着実に向上の方向に向かっていく一つの表れであろう。本学の全学教育FDの実施に先立って、北海道大学のFDに参加し研修を受けてきた教員の一人として、FDが本学の教育改善に静かながら確実に効果をもたらしていることに喜びを覚えるものである。

退職(予定)教員から



パーソンズの学問と教養教育運動 人文・社会科学の共通術語を求めて

文学研究科教授 高城和義

いまから40年ほど前の1965年、東北大学法学部から名古屋大学大学院法学研究科政治学専攻に進学し、アメリカの社会科学の研究を始めたとき、こんなにも長期にわたってパーソンズ研究をつづけようとは思っていませんでした。難解だとされるパーソンズ理論を理解しようと格闘しているうちに、いたずらに年月が過ぎ去ってしまったというのが実感です。

それでも長年研究を続けているうちに解ってきたこともあります。「20世紀世界最大の社会学者」ともいわれるパーソンズの独特の学問が、アメリカ独自の大学教育の特質と緊密に結びあっていることも、長いことかかって解ってきたことのひとつです。

ヨーロッパやアジアの大学に比べてアメリカの大学システムの際だった特質の一つに、専門教育を大学院レベルに位置づけ、学部レベルの教育をリベラル・アーツ、つまり、教養教育に置いている点にあります。これは、今日のアメリカの大学を形成してきた三大改革の結果でもあります。

まず第一にアメリカの大学では、ドイツの大学での専門教育の進展に刺激されて、本格的な総合大学（ユニヴァーシティ）を構築しようとした20世紀初頭に、大学改革がありました。このとき、どんな学問を専攻しようとも、その基礎にリベラル・アーツを身につけることが不可欠であるとのシステムが確立されました。パーソンズ自身この新たな教養教育の申し子と

して知的成長を遂げてきました。

アメリカの大学における2度目の大きな改革は、第二次大戦直後、軍務のために延期されてきた大量の青年とGIビル（参戦した報酬としての大量の奨学金）をえた青年とが、大挙して大学に向かったときでした。このときも多くの議論の末、教養教育の不可欠性が再確認され、新たなカリキュラムが工夫されました。原子力や新たなバイオテクノロジーを、社会と人間のためにヒューマニズムの精神を基礎に如何に発展させるかが真剣に問われました。二度とナチスの科学者や日本の軍事研究を生みださないことが目ざされたのです。

パーソンズも新たなカリキュラムの編成のために尽力しています。敗戦国日本でも、アメリカの教養教育を取り込んだ新制大学が発足しました。戦前の帝国大学とは異なり、新制大学で、どの学部に進学するにも、まず教養教育として自然科学・人文科学・社会科学を学ばなければならないとされたのはそのためでした。

三度目の大規模な大学改革は、70年前後に先進国世界を席卷した「学生反乱」とともにやってきました。このときもハーヴァード大学の日本研究者として著名なロソフスキー教授を先頭として、教養教育の再確立が目ざされました。「オウム」の科学者のような技術者を生みださないためにも、しっかりした教養教育が不可欠であると考えられたからです。

このような教養教育を軸としたアメリカの大

学には、基本的にリベラル・アーツ・カレッジもしくは教養学部しか存在せず、この中に自然科学・人文科学・社会科学が併存しています。ですから教養学部のスタッフの中には、自然科学者・人文科学者・社会科学者が基本的に対等関係の仕事をしており、研究・教育上の大学行政も、相互の討議を通じて推進されることになっています。専門的研究・教育は大学院と専門職学校にゆだねられます。ですから教養学部のスタッフとして、社会学者の研究室の隣に経済学者がいたり政治学者がいたりすることもまれではありません。学部の壁などというものは基本的にありません(高城 1989、参照)。

このような独特の大学システムを積極的に構築し推進してきたパーソンズは、人文科学・社会科学に共通の術語や方法を構築すべく、一貫して「統一科学運動」を推進してきました。可能なかぎり科学の一体性を追求しようとしたのです。

その結果パーソンズは数十年の長きにわたり、人間と社会を理解するための「行為の理論」という理論枠組みを彫琢しつづけるとともに、あらゆる社会を分析するための「社会システム論」、さらには宇宙・自然・人間をトータルに把握するための「人間の条件パラダイム」を構想してきました(高城 2002、参照)。パーソンズの学問が、経済学・社会学・政治学・心理学・歴史学・人類学・宗教学と、人文・社会諸科学にまたがっているのはそのためです。彼は絶えず若い大学院生や異なった分野(生物学や物理学をふくむ)の研究者たちと共同討議・共同研究を重ねてきました。これら無数の共同研究が彼の学問の触媒であったといわれています。専門分化の激しいこんにち、このようなルネサンス的研究者とルネサンス的学問とが成立すること自体、驚き以外のなにものでもありません(高城 1992、参照)。

国立大学が廃止となり、新たにどのような大学を作り上げていくのか、新たにどのような学問を形成し、それを基礎にどのような教育シス

テムを構築するのが根本から問われているわが国の大学の現状に思いをいたすとき、アメリカの大学の歩みとパーソンズの知的営みから学ぶべきことはまだ無数にあるというのが、筆者のいつわらざる実感です。

すでに与えられた紙数がつきてしまいましたので、最後に一言だけ、パーソンズがこんにちのわれわれに残しているメッセージを紹介させていただきます。パーソンズは晩年になって、現代社会を、「契約社会」というよりもむしろ、「信託社会」として把握することが重要だと力説しました。医師 患者関係に見られるように、医師は信託者(患者)の信頼に応えて、自己利益を顧みず信託者の利益のために尽力する「信託責任」を負っています。これと同じように大学と大学人とは、社会の知識と文化とを保存しこれを発展させる「信託責任」を負っていると見ることができます(高城 2003)。この観点に照らして、こんにちわれわれはどのように「信託責任」を全うしようとしているのでしょうか。いつか膝を交えて議論したいと願っています。



Talcot Parsons, 1902-1979
家族が最も気に入っていたタルコットのポートレート

参考文献

- 高城 和義 1989 『アメリカの大学とパーソンズ』 日本評論社
 ---- 1992 『パーソンズとアメリカ知識社会』 岩波書店
 ---- 2002 『パーソンズ 医療社会学の構想』 岩波書店
 ---- 2003 『パーソンズとウェーバー』 岩波書店



大学教育における看護学教育 看護学教育にとって、 教養教育は専門教育でもある

医学部教授 齋藤ひろみ

はじめに

学士課程に位置づけられた看護学教育において、教養教育は看護の専門性を高め、看護実践能力を育む重要な意味を持っていることを、看護の専門性や看護学教育の現状を概括しながら述べたい。平成15年10月に医学部に3専攻からなる保健学科が設置され、平成16年4月より学士課程の教育が開始された。看護学専攻では、保健師・助産師・看護師の国家試験受験資格取得に繋がる専門職教育を包含した看護学教育を行っている。

1. 多様な看護教育

わが国の看護教育は、文部科学省と厚生労働省の共管である「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」(昭和26年制定。以下「指定規則」という)に基づいて、大学、短期大学、専修学校、養成所、高等学校と多岐に亘る教育機関で多様な教育課程で行われている。学士課程の教育は昭和27年に開始されたが、進展を見ず、平成4年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」施行を契機に急増しはじめ、平成17年4月には127校、1学年定員9544名に達した。しかし、看護教育の9割は学士課程以外の多様な教育課程で行われている。近年の看護系大学の急増の背景には、社会情勢の変化や国民ニーズの高まりに応え、確かな専門性と豊かな人間性や的確な判断力を兼ね備えた資質の高い看護師の育成を図るといった社会の要請があった。

2. 「看護」の定義

看護とは何かについて、近代看護の母といわれているフローレンス・ナイチンゲール

(1820 - 1910)の言葉を紹介したい。「看護覚書」(1860年)の中で“病気は、健康を妨げている条件を除去しようとする自然の回復過程の働きである。それは癒そうとする自然の試みである”。“看護は、自然が健康を回復させたり、維持したりするのに最も望ましい条件に生命を置くことである。つまり、新鮮な空気、光、暖かさ、清潔さ、静けさを適切に保ち、食事を適切に選んで管理し病人の生命力の消耗を最小にするよう適切に行う、健康人の生命力を出来るだけ高めるようにすること”と述べ、さらに、「病人の看護と健康を守る看護」(1882年)では、“健康とは良い状態をさすだけでなく、われわれが持てる力を十分に活用できている状態をさす”と、今日にも通用する看護の原点を述べている。ナイチンゲールは、看護学が医学とは異なる分野であることを指摘していたが、わが国では、看護学は長い間、医学のものの見方の影響から抜け出ることができずにきた。このことが、多様な看護教育課程を生むことに繋がっていたといえる。

3. 学士課程における看護学教育の特質

H16年3月に文部科学省は「学士課程における看護基礎教育のあり方に関する報告」で、看護学教育の特質を5項目挙げている。それらは
保健師・助産師・看護師に共通した看護学の基礎を教授する課程である
看護生涯学習の出発点となる基礎能力を培う課程である
創造的に開発しながら行う看護実践を学ぶ課程である
人間関係形成過程を伴う体験学習が中核となる課程である
教養教育が基盤に位置づけられ

た課程である、というものである。

4. 看護の専門性を高め、看護実践能力を育成する教養教育

1) 人間関係形成能力の育成

看護は対象となる方との人間関係の中で展開するものであるから、看護者がその方とどのような人間関係を形成するかによって、看護の質が左右されるという特徴がある。その方の健康生活と自己実現を支える看護実践過程では、個別性に応じた深い人間理解と、倫理的自覚に裏付けられた科学観が問われる。看護者自身の教養・人間性が深く関わるのである。“Nursing is character”ともいわれる所以であろう。青年期の真っ只中であって、学生自身の人間形成とコミュニケーション能力の育成が求められるのである。これらは、実習体験、教養教育で多く培われる。

2) 創造性の育成

看護では、常に、対象の方のニーズに応じた創造的なケアが求められる。なぜなら、それらのニーズは個別的で多様で、時に潜在的で、看護実践の場も複雑な個々の日常生活の場へ及び、しかも、看護者との人間関係の中で展開されるので、画一的な方法論は功を奏さないのである。“Nursing is art”ともいわれる所以であろう。この創造性には、学際的な科学的知識や論理性や人間性の素養が必要である。

3) 看護の探究力の育成

看護は実践の科学である。したがって、看護の探求は単に学者の役割ではなく、一人ひとりの看護実践者によっても行われる。生涯に亘って看護の専門性を探求し、自立した専門職としての自己研鑽をし続けられる能力は教養科目が担う根幹的な基盤教育で多く培われる。

5. 看護学士教育の現状

1) 過密なカリキュラム編成である。本看護学専攻の例を挙げると、卒業認定単位は全学教

育科目41、専門教育科目88の129単位である。助産師選択者は15単位（講義10、実習5）が88単位に加わる。指定規則では専門科目111単位なので不足分23は他の専門科目で読み替え（ダブルカウント）している。全学教育科目は、他の学部が多くが50単位程度を配置していること、前述した看護学教育における教養科目の重要性を考えると、まだ、少ないといえる。しかし、10単位を増やす余裕は時間割上難しい。それは、専門科目88単位のうちの27単位は臨地実習で、しかも、実習の1単位は45時間と指定があるので、1215時間という多くの時間を要するからである。全国的に見ると、教養科目40単位を確保している大学は極々少数である。

2) 実習の量と質の制限がある。看護学教育の中核とも言える体験学習は、病院、市町村保健センター、訪問看護ステーション等の実社会で行われる。臨地での実習では、未資格者が実践できる内容には限度があることや、学生数の増加に伴う実習場の確保の問題がある。卒業までに修得させるべき「看護実践能力の基本」とは何かの整理も含めて、多くの課題がある。おわりに

21世紀はケアの時代とも言われ、人々が必要とする看護を、必要時提供できる資質の高い人材の育成が求められている。私事だが、昭和36年に3年課程の看護学校へ入学した。入学直後、「看護を實踐していくには並みの教養ではできない」と直観した。この認識は44年間私を貫いている。看護学の発展には教養教育が必須であるのは、看護学が人間学と不可分であるからでもあろう。今後、学生のニーズに対応したカリキュラムが検討され、伝統ある東北大学にあって、密度の高い教養教育に裏付けられた看護学教育を創っていききたいものである。



教職：教わること教えること

工学研究科教授 井口 泰孝

私は小さい頃から先生と呼ばれる仕事に尊敬と畏敬を持ち、自分がなれるとは思わないまでも、夢は持ってきた。高校3年の夏休み過ぎに社会科の先生という夢を、鉄鋼産業での技術者、研究者を目指す方向に転換した。丁度45年前である。担任の先生、周りに相談すると、東北大学の金属は本多光太郎先生で有名、また入れるレベルであるとのアドバイスで東京を通り越して仙台に来た。無事、修士を終え、鉄鋼会社に就職したが、当時は珍しい社会人ドクターで派遣された。企業に戻り、学生のことを考えた教育を“私でなければ”と若い生意気な考えで、直ぐに大学に戻った。幸い、先生、先輩、同輩、後輩、学生に恵まれ、教授になれた。このような自分を以前から見つめ、反省し、前に進むとき、「教育とは」を何時も考え - 何を学び、何に興味を持つか？持てるか？持たせるか？学ぶ喜び、知る喜びって教える事が出来るのかどうか、教える喜びを本当は教わる側にも理解して貰うには - 悩みつつ、忙しさを口実に日々が瞬く間に過ぎ幸い定年を迎えられそうな年になった。

希望を持ち入学し、教養部には魅力ある文系の科目が一杯あり、当然のことながら履修できるだけ受講した。何よりも優先した学友会体育部卓球部では鈍った体力を鍛えるとともに、総合大学の強みの幅広い友達を作ることが出来た。最後は体育部長を務め全国7大学総合体育大会で総合優勝し、当時の阿部博之総長を胴上げ出来た。教養部はGHQに押し付けられたとの意見もあるが、私は素晴らしい理念に基づい

ており、カリキュラムも満足できるものであったと思っている。しかし、学生時代一部の休講の多い教官や、2クラス100名の授業クラス編成に問題があったと思ってきた。教官になり、なぜ、教養部は解体されたのかを考えた。総合大学の中に2つの制度・組織と2種類の教官があり、多くの問題点が噴出し、結果的に学部改組してなかった東北大学も廃止した。現在も英語教育、実験等全学教育に廃止の後遺症が認められ、その歪の解消に各部署は対応させられている。

入試には長く携わり、工学部の無試験推薦入学の導入を検討、実施した一人であり、今でも意欲あり、自ら考え、行動できる若者を迎え入れるにはとの命題に日々悩んでいる。私は常々先生方に、“入試で汗をかかないと研究室に学生を迎えるとき冷や汗をかく”、とお願いして、入試の重要性を説いている。若者に魅力ある大学を作り、学生の身になって、基礎科目、専門科目、語学、倫理等の人間教育を情熱を持って実行し、学生の高い習熟度を目指し、そして社会に送り出す。工学部では充実したスタッフと院生との協力による卒業研究が学部卒業生のレベルアップに不可欠と考え、行われてきている。工学研究科では85%以上の進学率となった大学院前期課程と学部との教育の一体化、一貫性を検討しており、一部、学科・系・専攻によっては運用で、実行されている。このためには教育・研究をする優秀な教員の確保とその養成が最重要である。採用、昇任の評価が相変わらず、研究業績主体であり、知識の受け渡しだけでな

く、真に教えることが出来る人材が大学に十分いるか、反省をこめて、自問自答している。種々のハラスメントが顕在化してきている現在、特に考えさせられる課題である。

たとえ、日本経済がリセッションといえども恵まれた経済的環境の下で、育った若者も同世代人口の急激な減少に直面している。見掛け競争が減少したかに見えるが、より激化して行くことは必定である。10年後、20年後、自分たちが日本、次の世代を支えていくという実感はあるのだろうか？ 溢れるほどの食べ物、物に囲まれ、人を感じなくても生きていかれるとの錯覚で、生活している多くの若者との間には、戦争、戦後を経験した大人にとっては、理解できない程のギャップがある。このような現実を踏まえ、私たちは何が出来るだろうか？ あらためて、教育とは、を考えている。

ゆとり教育で学力が下がったといわれる若者には、出前授業・大学カリキュラムの先行取得等の高大連携、リメディアル教育等で補い、充実させ今のレベル維持、さらには向上を目指す必要がある。若者のインターネットやパソコンに対する力は年を取った教授を凌駕しており、ただ学力が低下したとの批判は適切でない。理系科目・ものづくりに興味を持ち、倫理等を含めた幅広い工学教育の充実が不可欠である。

平成14年、2002年は日本の科学に携わっているものにとり、前年以上に嬉しい年であった。小柴先生のノーベル物理学賞、田中さんのノーベル化学賞（平成14年11月より東北大学工学研究科の客員教授になられたので、先生が正し

い呼称である。）受賞である。特に工学部に学び、産業界と接している筆者にとって、田中先生の受賞は産業界の技術者、研究者に非常に励みと、誇りをもたらしてくれたと感謝している。さらに、一般の方を引き付けるあの人柄である。東北大学にとっても初めてで、しかも研究第一主義、実学重視の校風からの卒業生ということもあり、二重、三重の喜びを享受している。ノーベル賞受賞で学生、社会そして産官でさえ、東北大学への見方、評価は大きく変化した。

科学技術の素晴らしさの一面に喜んでいる間に、原子力発電所の問題、スペースシャトルコロムビアの悲劇、地震・津波、ハリケーン・台風等の自然災害、数上げると大小多くの考えさせられる問題が山積している。科学者・技術者の過信・傲慢だろうか？ 危機管理、倫理は・・・

最後に、大学の重要なミッションである教育、研究（特に基礎、基盤研究）については、工学部・工学研究科では常に世界を視野に入れて、活動してきた。法人化後も何も変わることなく、さらに、一層、学生、社会が満足する成果を世界に発信する覚悟を継続して欲しいと願っている。特に教育では、教員が学生の目線に立ち、グローバル化した社会に如何に優秀で日本の将来を託せる卒業生を送り出せ、しかも、卒業生との強い連携とともに生涯教育に本格的に生み出すときであると痛感してきた。

定年を目前にして、雑感を述べさせていただいた。東北大学の今後の発展を祈念する。



果てなき海へ漕ぎいでて

流体科学研究所教授 南部 健一

TOEFLやTOEICで満点を取っても、英語が話せると思っただけではいけない。満点なら、日常会話には不自由しないであろう。しかし外国人と、政治・経済や歴史、さらには、命と愛や人間存在の意味について語るには、まず、自分自身が語るべきものを持っていなければならない。日本の国際化とは、日本人が日本について知り、己について知り、それを外国人に対して語ることができることから始まる。国際会議のバンケットで外国人と雑談をしていると、彼らは私に、日本の先生方は退屈だと言う。日本人は生真面目で、バンケットでも仕事の話をしている人が多い。ワイングラスを何度も飲み干すにつれ、外国人は私に、趣味はもとより、生きる根幹に触れる話題をもちかけてくる。ソフィア大学のある若者は、バンケットのあと私を彼の部屋に誘った。そして愛について語り始めた。最後に彼は、妻と別れる是非について私の意見を求めた。またロシアのイワノフ教授は私のグラスにウォッカを注ぎながら、北方領土をどう思うか尋ねた。私は「北方領土はもとより、ウラル山脈から東側は日本と一つの国になった方がよいのではないか」と言った。彼は爆笑して「それはおもしろい。そうするとケンイチといつでも酒を飲める」と答えた。ミラノ工科大学のチェルチニャーニ教授は、ダンテの神曲をよどみなく朗唱し続けた。詩吟で和漢朗詠集の一節を返せたら、この場はもっと盛り上がるのにと、残念に思った。若いドイツ人のヴェッツェル君は、浅間山荘事件の後、実行犯坂口の父が自殺した理由を私に尋ねた。彼は、成人した子の犯罪に

対して、親を死に追い込んだ日本社会を批判した。彼の憤りは、そのまま、個の尊厳を軽んずる日本社会に向けられていた。

理系・文系を問わず、中学・高校の授業と大学の教養教育は、世界の人々と、同じ一人の人間として人生を語る知性の基礎であろう。この基礎の上に各人が自分の色の石を積み上げて行けばよい。昭和40年に金沢大学を卒業し、東北大学大学院工学研究科に入学した。それ以来今日まで、理系の学究生活を送って来た。この間、私を支えて来たのは、文系の教養教育を出発点とした人間としての成長であるという気がする。人は年齢とともに、「与えられた自分の命をどのように使うか」という問に対して、より厳しい答えを出せるようになる。すなわち価値ある重要研究課題に挑戦し、これを成功させて命の足跡を残したいという気持ちになってくる。世の中を見ても、素晴らしい研究をしている方は、謙虚で頭が低く、また人間として深いものがある。自然や人間に対して深い愛を持っていなければ、学問をしても無駄である。

なんの脈絡もなく、なぜか私の中に今でも留まっている文系の断片を並べて見たい。17歳のとき「I shot an arrow in the air ...」で始まるLongfellowの詩を教わったが、思い出すたびに心が青く深い空に向く。金沢市の片田舎に住んでいた小学生のころ、手製の弓から、高い空に浮かぶ飛行機とんぼの群に向かって矢を放った。青竹の矢はブルーの空に吸い込まれるだけであった。教養部学生するとき、山岳部の数名が冬の立山で遭難した。インド哲学の橋本教

授は、合掌したまま命果てた彼らを称えた。日本文学の教授は、世間胸算用に登場する「分限者」の富裕さを定量化して見せた。あきれられるほど無用の研究に思えたが、「文学」の得体の知れなさが心に強く残った。西洋哲学の鬼頭教授は後に自殺したが、サルトルの本を買って読む気にさせてくれた。心理学の教授は、ユングとフロイトの世界を私に垣間見させてくれた。ドイツ語の講義を受けながら、当初私は、英語も十分でないのに無駄ではないかと思った。しかし次第に読めるようになり、自分は高校生とは違うというプライドが湧いて来た。ヘルムホルツの「Eis und Gletscher」がかなり楽に読めるようになり、嬉しくなって自分で小品を買って読み始めた。特に、ハイネの「Im wunderschönen Monat Mai」は暗唱するほど愛した。

金沢大学では漕艇部に席を置き、激しい練習に明け暮れた。当初、肉体の苦痛と戦っていたが、やがて、苦痛のかなたに限りなく清澄な世界があることに気づいた。大学時代は、少しは知性の感じられる学生になりたかった。漕艇部の合宿では、皆疲れて眠っている間に世界文学全集を読んでいた。アンナカレーニナを読んだとき、愛する人とようやく再婚できたアンナが何故自殺しなければならなかったのか、何ヶ月も考え続けた。東北大学大学院では、楽しみとして鬼春人先生のロシア語の講義を受けた。2年目のテキストはプーシキンの「スペードの女王」であった。ゲルマンの狂気が身近に感じられた。これが終わるころ少し読めるようになり、嬉しくなって何冊かの小品を独りで読み始めた。プーシキンの「老駅長」は、強く心を打った。この物語の駅は、駅馬車の駅である。最愛の娘をさらわれた駅長は、死にもの狂いで男を追った。ようやく男と娘がある駅舎にいるのを発見した駅長は、窓ごしにそっと二人の様子をうかがった。娘は男の巻き毛に指をからませて打ち解けた様子。娘が男を愛していると知った

老駅長は、黙って立ち去った。日本民謡の「最上川舟唄」や「おたち酒」にしても、親の心は、はやり風邪などひかずに無事でいておくれ、と遠くから願う無償の愛である。

40代の前半、国文学の松野陽一先生の東北大学開放講座「伊勢物語」に参加した。先生の講義は素晴らしかった。講座終了後も、同好の志で勉強会を作り、物語を最後まで読み通すことになった。尊鎮親王筆の影印本も美しく、私もこの会に加わった。23段の「筒井筒」は高校のとき教わっていたが、大人になって読み返してみると別の感慨が湧いた。男の心が「高安の女」に移ったことを知った女は、高安へ旅立つ男を、いやな顔も見せず静かに送り出した。男が去ったあと化粧をしてももの思いにふけり、「風吹けば沖つしら浪たつた山 よはにや君がひとりこゆらむ」と彼の身を案じた。ここには、愛するということが、我が身を忘れその人の無事をひたすら祈ることである、という主張がある。

最後に、学生諸君に、学問（研究）をすることの天国と地獄について語っておきたい。学問をすることは人生そのものであり、平坦な道ではない。才能や思いつきだけでよい研究が出来ることはない。研究にのぞむ姿勢、生きる姿勢がそのまま研究の質に反映されてくる。1970年に博士の学位を取得し大学院を修了した。博士研究でアメリカ機械学会のMoody賞を受賞した。指導教官の伊藤英覚教授（現 学士院会員）はこれを大層喜び、博士研究を継続してはどうかと私に勧めた。私は、学位論文の研究は完成度が高く、本質的な問題はすべて解決したと思っていた。先生の誘いを断わり、好きなことをやらせて下さいと頼んだ。当時も今も、研究の原動力は、謎を解きたいという意欲であると信じている。やれば出来るテーマには夢中になれない。先生は私の無礼な希望を条件付きで受け入れてくれた。「何を研究してもよい。た

だし外国の一流の学術誌に掲載されるような成果が挙げられなければ自発的に辞職すること」という条件である。私は直ちに承知した。これで研究テーマを自由に選べると思うと気分は壮快であった。それに、好きなことをやらせてもらって成果が挙げられなければ能力がないということであり、大学に居座るのは人生の無駄と考えた。

先生から独立後、まず、自分だけの力で欧米で通用する論文が書けるか試してみた。大学院で勉強した流体力学の分野で、評価の高い国際誌にいくつかの論文を載せることが出来た。しかし流体力学全般を見渡すと、私のやっていることは落穂拾いにすぎないと思った。流体力学の最後の謎である乱流の研究こそ、真に価値ある研究だと思った。乱流の論文をひたすら読んだ。ますます分からなくなって来た。乱流は、決定論的でもあり確率論的でもある。人知を越えた新しい自然観を要求しているのか。歯がたたないと思った。また、乱流の研究は物理学全体から見れば地味に思えた。乱流が色あせて来た。論文を1つも書かずに撤退した。次に、高温気体の緩和現象に興味を持った。気体分子の構造の変化が流れに影響を与えるという新しい流体力学である。取り組んだものの、物理の力が不足していた。量子力学、電磁気学、古典力学を一から勉強し直した。研究成果が国際誌に載るようになって来たが、撤退することにした。時代は、正確な分子間力の計算を求めていると予感したからである。そんな力まかせの退屈な仕事はしたくなかった。

今度は希薄気体に興味を持った。宇宙船や人工衛星の周りは、気体の密度が低い希薄気体になっている。NASAはこの方面の研究に力を入れていた。基礎式はボルツマン方程式であり、大学院で5年間勉強したことは、何の役にも立たない。そんなことはどうでもよかった。Vin-

centiとKrugerの専門書を無我夢中で読んだ。楽しかった。ミスのない的確な英語表現を読んでいたら、著者の性格まで分かるような気がした。温度の本質が分子の平均運動エネルギーであると知ったときの新鮮な驚きは、今も忘れられない。

当時(1980年)、シドニー大学のバード教授が提唱したDSMC法というボルツマン方程式の解法が大流行していた。私は、DSMC法は正しい方法ではないと直感した。厳密な解法を作ろうと思った。何もかも忘れて専念した。ある夕方、帰宅したら家内が台所に立っていた。声をかけたら振り向いた。隣の奥様だった。家を間違えたのだ。家族が寝静まったある真夜中のことである。発散積分をうまく処理する方法を思いつき、新理論誕生を確信した。歓喜に圧倒され叫びそうになった。朝起きると気分は高揚していた。自転車で通勤していたが、うわの空であった。赤信号で交差点を横切ったのか、周囲の車が一齐にクラクションを鳴らした。

この研究はドイツをはじめ、海外の数学者から高く評価された。国際シンポジウムで基調講演も依頼された。私は有頂天になり、この分野の応用研究を続けた。9年後によく研究がマンネリ化していることに気づいた私は、自信を喪失し、自分は研究者として失格だと悩んだ。この4年後にどうにか立ち直った私は、また独りで半導体製造用プラズマの勉強を始めた。おもしろくなって来た。1997年に、プラズマ中の電子の多体散乱に関する法則を発見した。54歳になっていたが、久しぶりに17年前の歓喜がよみがえった。

定年退職を間近にひかえ、これまでの学生生活における苦悩、歓喜、挫折を、学問を志す若い人達に語るつもりで、本随筆と同じ書名の本にし、丸善仙台出版サービスセンターから発行した。



専門を支える教養の広さを - 教養の原点は歴史観と潮流観 -

前松下電器副社長
東北大学監事 杉山 一彦

大学を卒業し社会に出て10年ほどの頃、企業で生産機械の開発に没頭していたある日、本社からの要請で「入社試験問題作成」の仕事を担当する体験をしました。その時の私は30歳代前半で、いわゆる若手という年代でした。この仕事を始めたときのある種の戸惑いの感覚を今でもよく覚えています。

小学校にはじまり、中学・高校・大学においてさえも問題は上から示され、自分はそれを解く立場でした。さすがに会社では自分の担当分野で10年の経験も積み、当時は新工場建設の一つも任されていました。しかし、高度成長時代では、問題・課題は難題も多く大変なものでしたがその方向性は単純明快なものでした。その解決・克服に邁進すれば道は拓けるという時代でもありました。

しかし、いざ入社試験という大事なことについて「どんな問題を出すか」となると慮外に難しく、逆に出题する側が「あなたは何を、どんな人材を求めているのですか」と問われていることでもあるという緊張感を持ったものでした。

この時の体験が私にとって産業界で仕事をする上での考え方に大きな示唆を与えてくれました。社会での仕事とは、多くの問題について自ら課題形成をしてそれを解決していくことなのだと思うようになりました。

その頃から私は自分流に「問題意識」と「課題意識」を分けて考えるようになりました。例えば、家庭からのゴミ量が増大して処理できずに困っているというのは単なる「問題」です。

それを解決するためにA, B, C などいくつかの方策が考えられるが、A案はハードルは高いがこれを乗り越えると環境重視・持続可能社会への非常によい方法である。よし、これに取り組むことにしようとなれば、これはAという一つの課題形成となるわけです。

自ら問題点に着目し課題形成していくことは簡単なようでいて、的を射たものにするのは容易なことではありません。

社会でのよい状態、姿が出来上がっていく過程について、二つの道筋を感じます。

一つは、一生懸命に努力を重ねて歩みつけてきた。その結果、こんなよい姿になった。今一つは、こんなよい姿を作りあげようと思いついた。そこに力を結集して、このようなよい姿を達成した。

いずれの道も重要であり、両者共に偉大な成果例があります。伝統芸能を守り育ててきた人々の努力は「前者の例」と言うことができます。

今、世界はあらゆる面で大きく変化しつつあります。この変化に押し流されずにありたい姿、なりたい姿を思い描きそれを実現してゆく「後者の行動スタイル」が重要です。

問題発掘への感性、課題形成の力、そしてその解決への力強さが求められる時代です。

しかし、社会で解決したい課題は決して単純なものではありません。気象衛星一つを軌道に乗せる科学的なことでも、老人介護という社会的な課題の一つにしても多くの分野の知恵と努

力を集めないと解決できません。しかもその実行の方法も一つではなく、ここに人の幅広い判断力が求められることとなります。

昨今、大学での教育・研究においては専門と言われる分野はますます深く、しかし極度に狭くなりがちです。

人の考える力、思考力という土壌の豊かさ、柔軟さは、単なる専門分野の追求のみではない一般教養に培われるものと私は信じています。とりわけ20才という多感な、柔軟な考え方（自分で気付いていなくても）の時の「教養の学び」は生涯の大切なものを残してくれるでしょう。

イギリスの名宰相、サッチャー氏の言葉の中に「人は人生において学生時代に学んだ多くのことを忘れる。しかし人はその中からいくつかのことを心に深く刻み忘れない。教育とはそこに何を残せるかである」という意味のことがあります。学ぶ人の立場からこれを言うならば生涯心に残る大切なものを得るためには「幅広い体験を求めることで、玉石の中の玉にめぐり逢える」ということでしょう。

多くの試みや挑戦をして、そこで磨かれた個性を自らの天分として大切にしてほしいものです。20歳前後という若さは専門という殻に閉じこもるには早すぎます。

私は50才になった頃につくづく高校時代に社会科で「世界史」と「時事問題」を受講しておけば良かったと思ったものです。仕事の世界でも、趣味の世界でも全てのことに歴史、過去、潮流があり、これを知ることの大切さ、楽しさを思い、またこのことが考えの源でもあるとの思いです。

音楽機器の開発にも長い歴史物語があります。

エジソンの蓄音機の時代からSP/LP/CD/MD/DVD・メモリーなどの開発の歴史には世代交代という不連続点があります。それぞれの

節目で開発者は技術の壁にぶつかり、それを打ち破って新しい世代を舞台に登場させるわけです。この分野の歴史と技術の潮流を知っているからこそ、次への目標的を射たものになるのです。

流通の形態として小売業に着目してみましよう。小売業の歴史は多様ですが単純化して言うなら町の小さなお店、百貨店、スーパー、ディスカウントハウス、専門分野店、コンビニ等々の流れがあります。夫々が生まれてきた社会的な背景や盛衰の歴史を知ることが次への発想に大きな力を与えます。

私流には、物事の歴史観や潮流観を持つことが未来を考えるための大きな支えであり、これが教養の原点であるといいたいと思います。

古来より日本の文化、文明は外来のものを受け入れて発展してきました。そして受け入れたものをじっくりと熟成して素晴らしい文化、文明をつくり上げてきました。日本の言葉としての漢字・カタカナ・ひらがなはこの熟成の例と言えるでしょう。伝統文化、日本建築などにも多くその例をみることができます。この「受け入れ熟成型」の風土はシルクロードという文化・文明の伝播の終着駅という地理的な条件のせいなのでしょうか。有史以来、逆に日本の文化文明を日本人が積極的に発信していった例はあるのでしょうか。このことについては思うところ多としますがそれについては別稿に譲ることにします。

今、外国と日本の最高学府の学生を一緒に議論させると、日本の学生は全く存在感がないと言われるのは残念です、日ごろから自ら問題を発掘し、課題形成をする姿勢、解決方法を問う姿勢が身につけていないからだと思います。

日本は多くの分野で世界のリーダーになるべき位置にあります。社会が求める人材への思いの一端を申し上げました。

特別寄稿



私の市政運営

まちづくりの12年を支えたもの

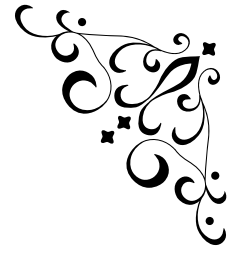
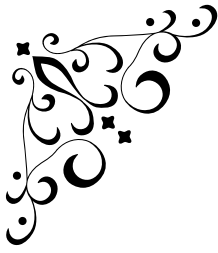
前 仙台市長 藤 井 黎

平成5年8月に第29代仙台市長に就任以来、3期12年を経て去る8月21日、無事に未来へのバトンを新市長に渡すことができました。まだ、職を離れて日が浅いため、思い出というほど遠い過去にはなっておりませんが、長い間の重たい肩の荷をおろしてほっと一息ついたというのが偽らざる気持ちです。

最近大学に入られた方は、平成5年といえば、まだ小学生の頃でしょうから、あのゼネコン汚職事件と言っても、あるいは記憶に薄いかもかもしれませんが、思い返せば、私が市長になって、最初に直面した事態というのは、きわめて厳しいものでした。当時は様々な会に出席の折、仙台市長であると自己紹介をただけで、期せずしてブーイングが起こるなど、会場内に冷たい空気が流れるということが何度もありました。さすがに、私自身も、慥然たる思いでしたが、このような屈辱は、ひとり私のみならず市民も各地で経験させられていたものであり、しかもその原因は、前市長の汚職という私も市民もまったくあずかり知らぬところにあったのでした。仙台の市民をこの苦境から救い上げ、街に誇りと活力を取り戻すことが、市長就任時の私の最大にして最優先の責務でした。

そのためには、市政のあらゆる分野で、公平性・透明性の高さが求められます。そこで早速入札制度の見直しを行ったほか、市政情報センターを設置して、強力に情報公開を推進しました。また、「市民の目の高さでの市政」を行うため、広聴制度の充実を図り、さらに市民と行政と研究者がいっしょになってまちづくりの課題を調査・研究する場として、都市総合研究機構を立ち上げました。

こうして、少しずつ失地回復に取りかかりましたが、信頼を失うのは一瞬でも、取り戻すには、長い年月を必要とします。私自身も、マイナスの遺産をゼロに回復するまでにかくも時間がかかるものかと、はがゆい思いをすることも度々でしたが、そうした鬱々とした日々心支えとなったのは、中国の古典でありました。学生時代から、唐詩などの魅力にとりつかれながら、折りを見ては紐解いておりましたが、漢詩は、簡潔な語句の中に深い心情を盛り込み、ふと口ずさめば日々の屈託した気



分も掻き消えてさわやかな気持ちさえ沸いてくるのが、大きな魅力だと思っております。

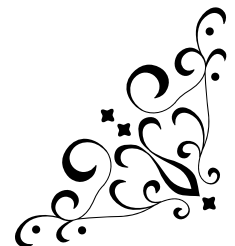
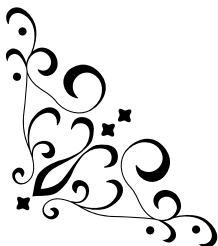
たとえば、唐の詩人王維の作に「行きては水の窮る処に到り 坐しては雲の起る時を見る」という詩句がありますが、中国の悠々たる大河のほとり、澄み渡る青空に群れ行く白雲が目浮かぶような一句です。漢詩には、おのずから背筋を伸ばして、物事の本質と向き合う気持ちにさせられるような不思議な力があり、効果十分な心の気付け薬になってくれたと感謝しています。

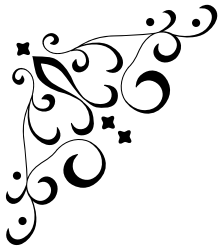
平成9年、二期目に入り、やっとプラスを生み出す作業に取り掛かることができるようになりました。仙台の都市のアイデンティティは、誰しもが認めるとおり杜の都であり学都であることです。折しも、21世紀が目前に迫っておりました。20世紀の都市は、ひたすら物の豊かさを追求し、膨張・拡大を続けてきたが、21世紀の都市はいかなる姿が望ましいのか。一つには、これまでは、量の拡大が国力であり、個人の目標でもありましたが、これからは、形あるものよりも形なきもの、すなわち優れた芸術や自然を鑑賞することによる心の豊かさなどの価値が大きくなるだろうということ、さらに私たちが健全な都市生活を実現できるためには、私たちを乗せる船である地球が、元気でなければならぬだろうということを考えました。それらを勘案し、未来への責任として、持続可能なコンパクトシティの形成を基本にすえ、緑の街に文化が息づく新しい杜の都づくりを目指す新総合計画「仙台21プラン」を策定したのが、平成10年でした。

具体の施策としては、百年の杜づくり構想や杜の都環境プランなどが動き出し、「参加から協働へ」の掛け声のもと、全国初の公設民営の市民活動サポートセンターもオープン、市民協働のまちづくりが立ち上がってきました。平成13年には、21世紀市民へのプレゼントともいべき新文化創造のインフラとして、せんだいメディアテークが開館するなど、現在に続く「自立と協働」の基本的な枠組がほぼ整ったのも、この二期目のことでした。20世紀から21世紀へ - 千年に一度というミレニアム。この大きな人類史の転換期に、市政の舵取りを委ねられたということは、夜明け前の闇の中で、一条の光明を探るに似た厳しい道のりであったと思います。市民待望の人口百万人達成、仙台開府四百年の節目もこの時期のことでした。

人生の価値をどこに置くかということは、人さまざまでありましょうが、私自身は、書物を読み、古今の人たちの足跡に思いを致すこと、自然の中を散策し、四季折々の草花に親しむこと、書や絵画を眺め、たまには手遊びの筆を持つこと等を心の慰めとしてきました。

こういう価値観が形成されたについては、一つには、昭和24年から28年にかけて私が在学していた頃の学生寮生活や東北大学の気風からの影響が少なくありません。当時は、阿部次郎や小宮豊隆など、いわゆる文人派教授たちはすでに職を退かれてはいたものの、その風潮もお色濃く、「三太郎



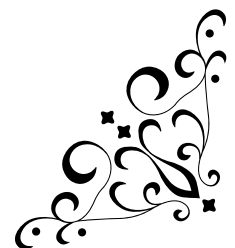
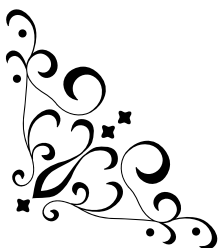


の日記」や「善の研究」はもとより、ゲーテやリルケ、またカントやマルクスなどを読み漁り、あるいは東西の名詩を吟じつつ、友人同士、人生論や世界観をめぐって夜を徹して語り合う日も決して稀ではありませんでした。

別の機会にも申し上げていることですが、私自身の人生設計の中に、政治家という選択肢はまったく入っておりませんでした。たまたまあの市政100年の歴史を揺るがす大事件に遭遇したために、結果として3期も市長を務めることになりましたが、自ら意図したものではありませんでした。ですから大学時代に、政治家になるためにこれは知っておいたほうがいいだろうとか、これは学んでおくべきだろうとかと考えて、勉強をしたというようなものは、残念ながらほとんどないのです。

このにわか仕立ての政治家として、何が役に立ったのかと振り返ってみますと、どうやらその当時から始まった、文学とも、社会科学とも、歴史とも言いかねるような一連の読書や議論などの混在した経験の堆積、あえて言えば、「教養という以外に名づけようのない何か」が、ここぞという時に総動員されて行くべき方向を指し示してくれたという気がします。たとえば、仙台城復元の中で、艮櫓の再建の是非が、一大議論的となりましたが、最終的に建設を中止すると決めた時に、神の啓示のように脳裏に浮かんできたのは、100年後の市民に残すべきものは何かという文脈においてでした。それは教養という意識下の水脈からの自然の示唆に他なりません。

これからの若い世代のみなさんが、海図のない未知の世界へ漕ぎ出そうというとき、お手本がないのですからいくら情報を集めても、情報の中に答はみつからないでしょう。自分自身に蓄積されたそれまでの経験・知見をもとに、自分の判断で先に進んでいかなければならない。今は、そういう時代です。そのときに、自らの判断の確かさを支えるものは、自分の中にある総合力、つまりは教養という名が与えられるものではないでしょうか。教養は、漠然としていて、無くてもすぐには困らないために、これまでの効率一辺倒の社会では、どちらかという軽視されてきました。けれども、教養に裏打ちされていない判断力は、被写界深度が浅い写真のようなもので、ピントが甘く、ぼやけてしまいます。これからの不透明な時代を生き延びるために、今こそ腰を据えた教養教育が求められていると感じているのは、私だけではないと思います。



「曙光」(しょこう)の由来について

曙光とは、朝の太陽の光であることは、説明は不要であろう。

ドイツの哲学者フリードリッヒ・ニーチェは、キルケゴールと共に虚無主義者と呼ばれる。然し、私は彼等を虚無主義と呼ぶのは誤っていると考えている。原本を読まれば直ちに判ることであるから此処には書かない。ニーチェであれば「ツアラツウストラはこう語った」あたりが分り易いと思う。

人間は妄執にとり巻かれている。今日の妄執の第一は偏差値であろう。諸君らの憎き偏差値は、君らの能力を示していない。例えば、岩波新書「天才」宮城音彌先生著を読みたい。他にも類書は数多くある。

君らの周辺に信ずべきものがあるのか。次から次へとニーチェは粉碎してしまう。もうやめてくれと云ってしまう程、何でも打ち壊す。考える輩はつよい。何でも突き破る。これがニーチェの著曙光である。然し、或る日、遂に壊れないものを見出す。そしてツアラツウストラ、つまり、君は、意気揚々と山を降りて里に向う。その君を照らすのが曙光である。若い君の力を輝かすように太陽はやさしい美しい光を君に注ぐのだ。

諸君、壊れるものをすべて壊し、本当に壊れないものを君の心の中に把め、それも、すぐ壊れてしまう。それが壊れたらすぐまた、本当に壊れないものを夢中になって把め、そして、本当に曙光を浴びる強い、あるいは、たをやかなる若人になれ。

(命名及び表紙題字)元東北大学総長 西 澤 潤 一

平成17年10月1日発行

編 集 東北大学学務審議会広報編集委員会
坂 本 尚 夫 学務審議会委員長
荒 井 克 弘 学務審議会副委員長
上 埜 高 志 教育学研究科 教授
升 谷 五 郎 工学研究科 教授
南 部 健 一 流体科学研究所 教授
静 谷 啓 樹 高等教育開発推進センター 教授

発 行 東北大学学務審議会

平成17年度後期セメスターの履修手続について

平成17年度後期セメスターの1, 2年次学生(留年者も含む。)の履修手続は次のようになります。履修手続は、**履修カードの提出と Web による履修登録の両方を必ず行ってください。**どちらか一方を行わないなど履修手続が不備の場合**単位が認められません**ので、注意してください。

※理学部2年次学生については、履修登録期間等が異なるので注意してください。(別途掲示参照)

履修カード等の受領 9月30日(金)～	「履修カード」及び「履修計画表」は川内北キャンパス管理棟2階教務課窓口から必要枚数をお持ちください。
履修カードの提出 10月3日(月)～ 10月14日(金) ※集中講義で行われる教職科目は提出期間が異なります。	履修カードを授業担当教員へ提出してください。 履修カード(教員用)を提出しただけでは、授業に出席し試験に合格しても単位が認められません。Web による履修登録を必ず行ってください。 集中講義で行われる教職科目については、10月3日(月)～10月7日(金)に川内北キャンパス管理棟2階教務課前提出用ボックスに提出してください。(別途掲示参照)
Web による履修登録 10月17日(月)～ 10月21日(金)	学部ごとの指定日はありません。 Web による履修登録は、定められた期間内に、各自、学内 LAN に接続されたパソコンを使用して行ってください。 マルチメディア教育研究棟1階の ICL 演習室のパソコンを使用する場合は、授業などが行われていない使用可能な時間帯を必ず各自確認のうえ使用してください。 別に掲示・配布する「履修登録についての注意事項」をよく読んでください。
履修登録の確認訂正等 10月24日(月)～ 10月26日(水)	履修登録内容を再度確認したい学生や、「最終登録」を行っておらず、一時保存状態で終了し、訂正・変更したい学生などのための期間です。最終日は混雑が予想されます。期間の延長はしませんので早めに「最終登録」を行ってください。 (10月27日以降は、履修科目の訂正、削除、追加などができませんので、注意してください。)